



TITLE:

<Book Review>Nature and Life in
Southeast Asia, Vol.III. Fauna and
Flora Research Society, Kyoto,
Japan, 1964,466p.

AUTHOR(S):

吉井, 良三

CITATION:

吉井, 良三. <Book Review>Nature and Life in Southeast Asia, Vol.III. Fauna and Flora Research Society, Kyoto, Japan, 1964,466p.. 東南アジア研究 1964, 2(1): 129-129

ISSUE DATE:

1964-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54896>

RIGHT:

の猿に喩えられる。さらに、Ayuthia, Lopbwi などの都市名、Sanphaya などの山名は、いずれも Phra Ram の物語の中に見られる。

このように、『ラマキエン』のタイ族に与えた影響は、非常に深く、かつ広いことが知られる。現在の舞踊劇は約200年前に Phra Ram I 世によって編述された物語詩からエピソードを上演しているが、それ以前には人形劇として、『ラマキエン』はシルエットあるいは影絵で上演された。その人形は鞣していない水牛皮を切抜いて2本の竹に張って作ったものであるが、訳者 VELDER は本書の中にこの人形を44図も挿入しており、Schattenspiel の資料として興味深いものがある。巻末の固有名詞索引はタイ語におけるサンスクリット語の借用を検討するのに有用であろう。2葉の系図表は登場する人物の関係を知るのに便利である。

訳文について批評することのできないのは残念であるが、流暢で判り易い。訳者は *Chieng Mai* に在住するようであるが、詳しいことは判らない。

(岩本 裕)

Nature and Life in Southeast Asia, Vol. III. Fauna and Flora Research Society, Kyoto, Japan, 1964. 466p.

大阪市大の東南アジア研究は吉良龍夫教授(理・植)を中心として着々とその成果を挙げておられる。この報告はその第3巻で、今までに行なわれた幾度かの調査隊の資料に基づき、生物学関係の報文が編集されている。

目次をひろってみると、

タイの蘚苔類 堀川芳雄・安藤久次(広大)

タイの淡水産軟体動物 波部 忠重(科 博)

タイの水ダニ類 今村 泰二(茨城大)

土壌内小節足動物の概観

今立源太良(東京医歯大) 吉良龍夫

タイのトンボ類

タイ・マレーのトンボ類 朝比奈正二郎(予研)

タイ・マレーの蝶類 川副 正人(日新高校・布施)

東南アジアの甲虫(Ⅲ) 中条 道夫(香川大) 他

タイにおける害虫防除の基礎調査 I

岩田久二雄(兵庫農大)

タイにおける狩猟蜂(Dieranorhina, Gastrosericus)の生態 岩田久二雄・吉川公雄(大阪市大)

タイにおける天敵としての狩猟蜂

吉川 公雄

熱帯の竹に営巣する前社会性膜翅類の巨大卵について

岩田久二雄

1961—1962東南アジア採集の医用双翅目について

加納 六朗(東京医歯大)

東南アジア採集のミバエ科・オドリバエ科

伊藤修四郎(大阪府大)

1961—62東南アジア採集のショウジョウバエ

岡田 豊日(東京都大)

と、まことに多彩である。次号はこのような生物相や各個生態の研究に加えて、森林相の研究、北西タイの民族植物学、北部東南アジアにおける宗教的標示の人類学的研究が予定されている。

大阪市大は本年度、さらにカンボジア計画を推進されていると聞いている。同大学の実行力に敬意を表するとともに、その成果について大いに期待したい。

(吉井良三)

Adam Curle: Educational Strategy for Developing Society—A Study of Educational and Social Factors in Related to Economic Growth, Tavistock Publication, London & Liverpool, 1963. ix + 180p.

著者は、現在 Harvard 大学の The Center for Studies in Education and Development の教授兼所長であるが、以前は Oxford で社会心理学の講師をつとめ、1952年から1956年まで Exeter 大学の教育学および心理学の教授であった。その後3年間 Pakistan 政府の社会問題顧問となり、1959年から1961年まで Ghana 大学の教育学講座を担当した。また、世界を広く旅行し、中近東の研究調査に従事したこともあり、本書はこうした広い経験をもとにして、東南アジアに限らず、新興諸国一般の開発問題を教育的・社会的側面から論じたものである。著者は、低開発の諸問題が本質的に、あるいは完全に経済的なものであるという仮定こそ、過去における誤りの主要な源であったとみなす。

低開発諸国はなるほど貧困である。しかし、それらの国はその人的資源がほとんど開発されていないが故